



はな さ たね 花が咲くとどうして種ができるの

はな たね つく どうぐ 花は種を作るための道具

植物にとって、種をつくり子孫を残すということがいちばん大事なことです。花はそのための道具で、おしべとめしべだけが種をつくる上で、欠かせないものです。そのほかの花弁やがくは、単なる飾りにすぎません。

はな さ じゅぶん たね 花が咲いても、受粉しなければ種はできない

花が咲いても、おしべの花粉がめしべの先について、受粉しなくては種はできません。花粉をめしべの先に運ぶのは昆虫たちです。リンゴ園では、ミツバチを飼う人たちが花の咲くころにミツバチの巣箱を置いて、受粉を助けるのはこのためです。虫の少ないときは、人工授粉といって、人の手で花粉を1つ1つの花につけて回ります。

やえ はな さ たね 八重ざきのものは、花が咲いても種はできない

八重ざきの花は、ふつう、種ができません。八重ざきの花には、花びらが何重にも重なりあってつきます。ふつうの花では、花びらをつくる花弁やがくの数は、植物ごとに決まっていますが、八重ざきのものはおしべやめしべが花びらの形にかわり、おしべやめしべとしてのはたらきを失っています。そのため、種ができないのです。（監修・中山 周平）

